

脊髄小脳変性症の重症度分類

	下肢機能	上肢機能	会話機能
I 度(微度)	<p>「独立歩行」 独り歩きは可能補助具や他人の介助を必要としない</p>	<p>発病前(健常時)と比べれば異常ではあるが、ごく軽い障害</p>	<p>発病前(健常時)に比べれば異常ではあるが、軽い障害</p>
II 度(軽度)	<p>「随時補助・介助歩行」 独り歩きはできるが、立ち上がり方向転換、階段昇降などの要所で、壁や手すりなどの支持補助具、またや他人の介助を必要とする</p>	<p>細かい動作は下手であるが食事にスプーンなど補助具は必要としない。 書字も可能であるが、明らかに下手である</p>	<p>軽く障害されるが、十分に聞き取れる</p>
III 度(中等度)	<p>「常時補助・介助歩行-伝い歩き」 歩行できるが、ほとんど常に歩行器などの補助具、または他人の介助を必要とし、それがない時には伝い歩きが主体をなす</p>	<p>手先の動作は全般に拙劣で、スプーンなど補助具を必要とする。 書字はできるが読みにくい</p>	<p>障害は軽いが少し聞き取りにくい</p>
IV 度(重度)	<p>「起立不能-車椅子移動」 起立してられるが、他人に介助されてもほとんど歩行できない移動は車椅子によるか四つ這いまたはいざりで行う</p>	<p>手先の動作は拙劣で、他人の介助を必要とする。 書字は不能である</p>	<p>かなり障害され聞き取りにくい</p>
V 度(極度)	<p>「臥床状態」 支えられても起立不能で臥床したままの状態であり、日常生活はすべて他人に依存する</p>	<p>手先のみならず上肢全体の動作が拙劣で、他人の介助を必要とする</p>	<p>高度に障害され、ほとんど聞き取れない</p>